

おむすびネットワークコミュニケーション



—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

今の西東京市に居を構えて38年になるが、引っ越して早々から、野菜は基本的に、玉川上水を挟んで反対側にある武蔵野市境4丁目にある清水農園のものを頂いている。清水農園は有機農業で栽培しているが、併せて、周辺の保育園や小学校等の体験学習を受け入れているだけでなく、個人やグループでの親子農業体験等にも応じている。園主は清水茂さん（71）で、3・11以降は放射能汚染の関係で堆肥をつくるのに苦労するなど、表情がさえないこともあったが、このところ表情は明るい。その理由は、第一に三女のもとみさんが後継者として名乗りを上げて頑張っており、今では大抵の作業はもとみさんを中心に回るようになって、ずいぶんと気が楽になったこと、そしてコロナの影響で畑への来客が増えていることが、大きいようだ。

清水農園の農地面積は20アールほどと小さいが、小規模であることを生かして、有機栽培による多品種少量生産を行うと同時に、いろいろな人が出入りできるよう農地を開放している。子どもたちの体験はもちろん、お母さんたちも大根を栽培してたくあん漬けをしたり、藍の種をまいて育て染色をしたり、さらには畑で収穫したものをビニールハウスの中で調理して食事会をやったりと、盛況。コロナで外に出られなくなった親子が、畑で間隔を取りながらコロナをあまり気にせずに作業等を楽しむことができ、それが口コミで伝わり、来園者の増加が加速している。

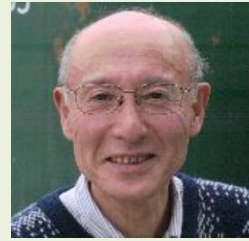


武蔵野市の新規就農者を前に熱く語る清水茂さん（中央）

筆者は、「清水農園は“空間提供業”という都市農業の一つの在り方を最先端で走っている」と見て、また書いてきた経緯がある。これについて清水さんは熱い思いを込めて「畑は村」「畑で村づくり」と表現する。地域のコミュニティーが崩壊しつつある中、畑を“村”にしていく。清水農園は住民が集う数少ない場、貴重なコミュニティーの場として機能しつつある。

このところ、筆者が事務局長を務める川崎平右衛門顕彰会が主催する「川崎平右衛門フェスタ in 武蔵野市」（これについては別の機会にご紹介させていただきたい）を11月3日に開催予定で、清水さんにもその実行委員会に加わってもらっており、このところ一緒に行動することが多い。そうした中でやりとりしていると、清水さんの「畑で村づくり」はさらに“進化”していることを教えられる。自らの畑に集まっている人たちをLINEでつないでグループ化して、栽培から催し等さまざまな情報を共有し、そして清水農園に足を運んで作業をしたり、交流したりしている。さらにこれを踏まえて、娘のもとみさんと同様に頑張っている武蔵野市等周辺の新規就農者ともLINEでつながりながら、それぞれの「畑で村づくり」を広げていく。そしてその広がった村をつなぐことによって「おむすびネットワークコミュニケーション」を創っていく、という。「おむすび」は結び、つながっていくの意で、都市農業者と市民による緩やかな共同体形成を目指しているものだ。

清水さんと自転車で都市農業の現場をずいぶんと回ってみたが、都市農業とはいっても区々で多様。都市農業を振興し、都市農地を永続的に保全していくためには、都市農家同士の連携と同時に住民との交流が欠かせない。「おむすびネットワークコミュニケーション」構想を応援していきたい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入庫、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。